3-6 関東・東海地域における最近の地殻傾斜連続観測
(1987年5月~10月)

Recent Continuous Measurements of Crustal Tilt in the Kanto-Tokai Area (May-October, 1987)

国立防災科学技術センター National Research Center for Disaster Prevention

前回に引き続き,孔井用傾斜計による地殻傾斜の連続観測結果について報告する。観測点の 配置及びブロック分割(I~V)を第1図に示す。傾斜計2成分は通常真北と真東に配置して あるが,特に深層3井(IWT,FCH,SHM)及びCKRの2成分(X,Y)の設置方位は第 2図に示す通りである。各観測点における傾斜毎時値及びブロック毎の代表点の日降水量を, ブロック別に第3図に示す。

この期間の一般的傾向として,夏期で降水量が多く,これによる影響の変動が大きい。観測 点 SIZ は観測施設隣接地の土砂崩れにより,現在観測を休止している。

観測点 CHS において7月上旬と9月上旬に顕著な変動が見られる。CHS の降水量を見ると 観測点 KTU とはかなり異なっていて、7月上旬と9月上旬の雨量が特に多く、この時期の顕 著な変化は降雨の影響による変動であることがわかる。観測点 CKR の Y 成分(南南東方向) において9月15日頃から10月末まで顕著な南南東下がりの変化が見られる。この変動は X 成 分と比較して Y 成分の変化量が非常に大きく、その傾斜方向は N160°E 下がりの方向である。 この方向は CKR の今までのドリフトの方向(N145°E 下がり)と近く、センサーの機械的な変 化である可能性もあるが、少なくとも地上電気部分に起因するものではない。この期間近隣の KTU・CHS 両観測点においては特に目だった変化は見られないが、深層観測点 SHM の Y 成 分(N42°E 方向)において9月25日頃からドリフト量が増加するような変化が見られる。

伊豆大島波浮地区にある観測点 OSM では 1986 年 11 月の噴火以来東北東下がりの変化が継続してきたが、5 月初め頃から傾斜方向が変わり、9 月中旬まで大略北ないし北北東上がりとなっている。9 月中旬以降はわずかに西上がりである。6 月 20 日頃に東西成分で見られる東上がりの変動の原因はわからない。

深層観測点の FCH では9月17日から孔底の観測計器の引き上げのため欠測し,10月24日 に互換機器を設置して観測を再開した。これに伴い FCH の設置方位が10月24日から異なっ ている。観測点 SHM の Y 成分では10月13日にセンサーをバックアップ機に交替させたが, 交替後のほうがかえってセンサーが不安定になっているようである。観測点 IWT では8月頃 からセンサーのノイズレベルが上がり,特に X 成分の状態が悪い。





Fig. 3 Hourly plots of crustal tilt: E, tilt change caused by earthquake shock; T, instrumental trouble; C, offset correction;?, unusual change caused by unknown origin.



Fig. 3 (Continued)



第3図 つづき Fig.3 (Continued)



![](_page_6_Figure_0.jpeg)

![](_page_6_Figure_1.jpeg)

![](_page_7_Figure_0.jpeg)

![](_page_7_Figure_1.jpeg)

![](_page_8_Figure_0.jpeg)

第3図 つづき Fig.3 (Continued)

![](_page_9_Figure_0.jpeg)

![](_page_10_Figure_0.jpeg)

![](_page_11_Figure_0.jpeg)

![](_page_12_Figure_0.jpeg)

Fig. 3 (Continued)

![](_page_13_Figure_0.jpeg)